

## 夢に挑戦する相産づくりを目指して

校訓「誠実」「創造」「努力」

平成22年8月30日(月)



○8月26日(木)野球部が秋季県下大会西播磨地区予選で、敗者復活で勝ち上がり、赤穂高校と西播磨地区最後の戦いをしました。その結果、逆転勝利、3対2で勝つことができました。緊迫したゲームを勝ち抜いた選手諸君、応援に駆けつけてくださった保護者の方々、本当に炎天下の中、ご苦勞様でした。9月7日に県大会の抽選会があります。



○バレー部が男女とも8月28日(土)西播磨高等学校バレーボール男女優勝大会に出場しました。この練習風景はそのための練習をしているところです。男子7名、女子7名の少人数チームです。試合結果は男子

初参加で、初戦敗退でしたがこれから伸びるチームです。女子もいい試合でしたが、惜しくも敗れました。今後、練習に励んでください。

### <本の紹介>

○『自由への長い道 ネルソン・マンデラ自伝』(NHK出版)を読んで、やはりと思いながらも深く心に残ることがありました。それは歴史の方程式なのですが、外部が裏切るのではなく、内部からの裏切りがマンデラ氏を中傷する形で出、その中傷が広く信じられていたことを初めてこの本で知ることができました。マンデラ氏は、南アフリカの有色人種差別政策(アパルトヘイト)撤廃のために戦い、反逆罪終身刑となりロベン島に27年と半年間牢獄に閉じこめられました。そして、世界の良心の声とデクラーク大統領(当時)の英断で、釈放が実現しました。その後の1994年の選挙で南アフリカ初の全人種参加による選挙が実現し、ANC(アフリカ民族会議)が勝利しました。そしてマンデラ氏が大統領になったとき、マンデラ氏は何度も有色人種のための政権を作るのではない、南アフリカ全民衆のための政権を作るのだと叫び、マンデラ氏の人格をもって、初めて全南アフリカの民衆のために民衆による政権が誕生しました。マンデラ氏はその後、北京大学・創価大学より名誉博士号を授与され、1993年、デクラーク大統領と同時にノーベル平和賞を受賞しました。

マンデラ氏が釈放され、良心ある白人はじめ、牢獄でマンデラ氏を監視する側にいた人ですら喜びました。このことは映画『マンデラと名もなき看守』で有名になりました。釈放時、マンデラ氏は牢獄で

お世話になった方々に一番にお礼を述べようとするのですが、民衆の熱狂でかないませんでした。世界中からマスコミが押しかけ世界を揺り動かす大事件になりました。私もその報道を覚えています。1962年、44歳のとき逮捕され、釈放されたのが71歳でした。彼は1918年7月18日に生まれました。この7月に92歳の誕生日を祝う多くの人々に囲まれたマンデラ氏の姿が新聞に載っていました。

自伝には、この時の様子については先に釈放された仲間の裏切り「マディバ（マンデラ）は軟弱になった。当局に買収されたことを、私は見通していた。三つぞろいのスーツを着て、ワインを飲んで、上等の食事をしていた」を多くの人が信じ、マンデラ氏を見る目が半信半疑だった様子が描かれています。ANCの全国執行委員会は「私（マンデラ）が釈放されたことを喜んでいましたが、同時に監獄から出てきた男を値踏みしようと待ちかまえてもいた。まなざしのなかに、その問いかけがあった」と書いています。それに対して「慎重に、かつ冷静に、わたしは、政府との対話がどういう性格のものであったかを話した。どういう要求を出し、どういう進展を勝ち取ったかをくわしく述べた」マンデラ氏の不動の信念と誠意ある対応にやっと参加者の心が溶けることになります。そしてANCより押され出馬し、選挙による南アフリカ初代統一大統領になるのです。

もう一つマンデラ氏が直面した問題は、白人への復讐を望む黒人層と白人の復讐されることへの恐怖でした。「獄中にいるうちに、白人に対する怒りは薄れていき、制度に対する憎しみがふくらんでいった。わたしが敵にさえ愛情を覚える一方で、互いを対立させる制度に憎悪を感じているということを全南アフリカ国民にわかってもらいたかった。『白人も同じ南アフリカ人です。わたしたちは、白人に安心して暮らしてほしいし、この国の発展に尽くしてきた白人層の功績をわたしたちは高く評価していることを知ってほしいのです』と私は言った」と書いています。

マンデラ氏の最後の大きな功績は、自分の運動理念を引き継ぐ後継者；ターボ・ムベキを育てて政界を引退したことです。これほどの政治的混乱をマンデラ氏なくしては收拾することが出来なかったでしょう。また、一代では混乱は収まらないことを見抜き、後継者作りにも専念しました。それがムベキ次期大統領でした。マンデラ氏・ムベキ氏が日本に来られたとき、私の恩師と対談されていた姿を新聞や映像で何度も見る機会がありました。その関係で、お二人は私にとって身近に感じてなりません。

○『心に残るとっておきの話』（潮文社第1集）「美しき空席」を読んで胸が熱くなりました。その一部を掲載します。

木戸さん（この記事を書いた人）はロサンゼルス郊外の眼下に海を見下ろす瀟洒なレストランで、日系人と一緒に夕食をとりました。そこですぐ目についたのが、純白の百合や菊、カーネーションの花を一杯飾って、2本の特別に大きなろうそくを灯した窓辺の予約席でした。どんな人がそのテーブルに着

くのか興味を持って見ていました。ところが最後のデザートになってもその予約席には誰も現れませんでした。気がつくともネージャーや給仕長が通りかかる度に立ち止まって情のこもった、いかにも優しくそれでいて妙にもの哀しそうな目で見ているので、木戸さんはマネージャーに理由を聞きました。マネージャーは次のように話しました（「」内は原文のまま）。

＜田舎風景；多可郡加美区＞

「ちょうど5年前の今夜でしたが、結婚式をあげた若夫婦が、このテーブルでお祝いの食事をなさいました。ローガンさんという船の乗組員の御夫婦で、やはり今夜のように花を飾りローソクを立てましてね、とても幸福そうでしたから私どもははっきり記憶しているの



です。次の記念日にもやはり二人で見えたのですよ。そして同じテーブルで食事をなされたのですが、3年目には5ドルの為替と電報だけが来たのです。奥さんは乳癌で亡くなられ、自分は航海中で来られない、しかしあのテーブルだけは自分たちのために予約済みにしておいてくれないか、という文面でした。あの清らかな美しい奥さんが・・・と私どもは、びっくりして御希望通りにしたのですが、それから毎年決まって為替と電報が来るのです。去年はヨコハマ、今年はロンドンからまいりました。きっと今頃、ローガンさんは遠くの空で亡くなった奥さんのことを想っておいででしょうね」

木村さんはその話に深く心を打たれました。卓上に飾られた花代だけでも5ドル以上のものでしたし、更に聞くと、このレストランはその5ドルの為替をそっくりローガンさんの奥さんが眠っている教会に、毎年献金されていました。私にとって心に残るとっておきの話でした。